重い病気や怪我をせずに十七年生きてきたから、体は丈夫なほうだと自覚している。大きな病院には見舞いに行くくらいの用事しかなかった。そんな私に、ある日突然機会がやってきた。

「検査入院になりますね、検査の前後も含めて大体一週間くらいです」

予約してから診察まで三ヶ月かかった大学病院の睡眠外来で、私を待っていたのは大らかな雰囲気の女医さんと、診察を見学する三人の医学生と、初めての宣告だった。

人生初の入院。不安かと聞かれたが、そうでもない。むしろ、大きな病院も入院も初めてのことだ。楽しみじゃないはずがない。病気と決まったわけじゃないし、家族と離れて生活するのだって面白そうだ。なんといってもここ、院内にコンビニとコーヒーショップがある。夢みたい。入院が怖いとでも言うと思ったか。

三月中旬、高校は入試のため一週間以上休みになる。その期間に入院することが決まった。検査自体は二日間で終わるけれど、その前に病院のベッドに慣れる必要があるから、二週間後の月曜日に入院して土曜日の昼に退院する。

睡眠外来は精神科の一部だけど、すべての精神科に睡眠外来があるわけではない。私が市内の総合病院ではなく、隣県のこの大学病院を受診することになったのもそれが理由だ

それからあっという間に月日が経った。月曜日の朝、お父さんの運転で車に揺られること一時間半。着替えや内履きの入ったバッグをお母さんに持たせ、私は学校の課題が入ったリュックを背負って車を降りた。ロビーに入ると、九時だというのに既に人でごった返していた。お父さんは駐車料金がかかる前にと、足早に車に戻っていった。受付のカウンターの立札には、「本日の受付予定人数　二〇〇〇人」と書いてあった。

用意した書類と保険証を提出して、入院案内をもらう。入院セットの入院着やタオルを受け取って、三階にある精神科に向かった。待合室には何人も人がいたが、受付に入院申し込みの書類を出すと、すぐに診察室へ通された。

診察室にはあの時の女医さんがいて、私との間には広い机、その上に数枚の書類があった。

「まず、これは入院同意書。精神科の入院にはいくつか種類があって、今回は本人の意思による任意入院です。本人が入院に同意することを証明する書類になります」

そうして私の前に差し出された書類には難しそうな文章がずらりと並んでいて、署名欄だけが空白をつくっていた。添えられた黒ボールペンで記名すると、ぽっかりと広い欄に、やや長い私の名前と、やや大きい私の文字がった。

ぴったり合っていた。

「二枚目と三枚目は研究に関する書類で、二枚目は研究要項、三枚目は個人情報の取り扱いについての同意書です」

次に見せられたのは十ページ程度の冊子と色付きの紙だった。お医者さんっていうだけでも忙しそうなのに、大学病院だから研究もあるのか。冊子はお母さんが目を通して、私は色付きのしっかりした紙の「同意します」を丸で囲んだ。

「これで手続きは終了です。次に、入院前検査をしましょう」

次に、私とお母さんは一階に戻って、いくつかの検査室を行き来した。正直これが一番大変だった。心電図検査は電極パッドを貼られるのがくすぐったかったし、採血検査では自分の血を見たくなくて目を逸らしていたのに、その方向に採った血を置かれて思わず声が出た。

早くも疲れを感じながら精神科に戻ると、やっと病棟へ案内された。診察などを行うのとは違う建物にあるので、渡り廊下を渡って、エレベーターを使ってたどり着くことができた。エレベーターといっても、商業施設にある普通のものではなく、歩行者用と、車椅子用と、台車やベッドがそのまま乗り入れる用のものが大中小と並んでいた。

歩行者用のものに乗って、付き添いの看護師さんが「3」のボタンを押すと、そこまでの速度は出ないらしく、ゆっくり動き出して、

やがてぽーんという音を出して止まった。

扉が開いた先は、インターホンと一台のソファがあるエレベーターホールで、大きくて厳重そうな自動ドアに繋がっている。

看護師さんが、首にかけたネームプレートをインターホンのカードリーダーにかざす。開いた扉を通り抜ければそこはついに病棟だった。

付き添いの看護師さんは、私とお母さんが持っていた入院用の荷物を一人で背負いあげて、正面にあるナースステーションに入っていった。お母さんが来られるのはここまでで、また手続きがあるらしく、ナースステーションから出てきた別の看護師さんは、私だけを病室に案内した。

私は四人部屋の四人目だった。病棟の入口で預けた荷物は、危険なものがないかどうか、中身をナースステーションで調べてから病室に届けてくれるそうだ。ポケットに唯一入れていたスマホを眺めていると、隣のベッドからカーテン越しに声がした。

「……普通に生きたいだけなのに……」

涙ながらに話す若い女性と、相槌を打つ看護師さんの声だ。明るい話題ではなさそうだから、つい聞こえてしまって申し訳ない気持ちでいっぱいになった。けれどもイヤホンは鞄に入っていて、その鞄はナースステーションにあるので聞こえないようにすることもできなかった。ここは病院で、精神科であるこ

とを改めて認識した。さっきまでの浮かれた気分はどこかへ行ってしまった。

聞こえてくる会話を意識の外に追い出そうとしてそわそわしていると、カーテンの外で私の名前が呼ばれた。控えめな声量では、と答えると、病室のカーテンが開いて、看護師さんが顔を出した。荷物を肩から下ろして、丁寧な自己紹介と入院生活の説明をしてくれる。この看護師さんが私を担当してくれるらしい。

「午後になったらもう一度来ます。一緒に病棟内を見て回りましょう」

そして、壁に検査のスケジュールを貼って病室を出ていった。

看護師さんが出て行ってから、入院セットに入っていた入院着に着替えてみる。きつくなくて着心地がいい。それから、試しにベッドに寝転んでみた。マットレスは家のものよりやや薄いが柔らかく、ふんわりと体を受け止める。寝心地は悪くないかもしれない。疲れから目を閉じかけたとき、放送のチャイムが鳴った。

「昼食の時間になりました。ホールまで取りにきてください」

同室の人たちがゆっくりとした足取りで部屋を出ていくのを見て、私も後に続いた。廊下では色んな人とすれ違った。手すりにしがみついて歩くおじいさんもいれば、私より小さい女の子もいた。入院着の足元からひどく細い足首が覗いていた。

ナースステーション前に大人の背丈くらいはある大きな台車が止まっていて、看護師さんとも違うスタッフさんが一人ひとりの昼食をトレーにのせて手渡していた。

病院食というものを目にするのは初めてだった。シンプルで味気ないものを想像していたが、実物は鮮やかでずっしりしていた。トマトのような赤いソースがかかった白身魚、大根と豆苗のサラダ、丼に盛られた大盛りのご飯、豆乳プリン。写真を撮ってから、まず主菜を口にしてみると、味は見た目よりヘルシーな感じだった。

食べ進めながら、食器の下に一枚の紙が挟まっているのに気が付いた。四つ折りを開くと、紙の見出しには「選択メニュー」とあり、これからの献立が表にまとめられていた。朝は二つ、昼は三つのコースがあり、それぞれ選ぶことができるらしい。パンかご飯か、うどんか焼きそばか三色丼か。わくわくしながら、好きなものが多いコースを丸で囲んだ。

昼食のトレーをさっきの場所に返しに行くと、担当の看護師さんに呼び止められた。

「ご飯食べられました？」

「はい、美味しかったです」

「良かった。じゃあ、これから病棟を案内します」

「まず始めに、すぐそばがナースステーション。昼は八人くらい、夜は五人くらいの看護師がいます。困ったことや聞きたいことがあったら来てください」

ガラスの窓から中を見ると、数人の看護師さんたちがパソコンに向かっていた。

「次に、この奥にあるのがデイルームです。ご飯をここで食べることもできます。日中は作業療法をやっています」

広々とした空間にはいくつかの椅子とテーブルと、テレビや本棚があって、数人が談笑していた。

来た道を引き返して、ナースステーション前を通り自動ドアの前まで来たとき、看護師さんが立ち止まり、振り返った。

「腕を捲って右手を出してください」

入院着の袖をたくし上げて差し出すと、ポケットから何かを取り出して、手首にぐるりと巻きつけた。つるつるした紙のようなもので、両端にプラスチックのバンドがついている。

「入院患者さん用のリストバンドです。チップが入っていて、ドアにかざすとＩＤを認証して開きます」

かざしても開かないように設定されている患者さんもいますけどね、と補足しながらバンドをぱちりと留めたのは恐ろしかった。

リストバンドには私の名前と、受診している科と、生年月日が載っていた。長さには余裕があってきつくはないけれど、バンド部分は一度留めたら外れない仕組みになっているようだった。

「あと、外出するときはナースステーションに声を掛けてください」

そう言って指さす先には、「外出可能時間：14時から20時」の張り紙があった。

病室の前を通り過ぎて、次に向かった先は洗面所だった。コインランドリーが二台と、洗面台が四台あった。隣接するシャワー室とお風呂は、九時から十八時に使えるらしい。

「これで一通り見終わりました。また用事があったら声をかけてくださいね」

病室に戻ると、午後の三時を過ぎていた。一度ベッドに寝転がれば、意識は吸い込まれて今度こそ眠りについた。

目が覚めたのは夕食の放送が鳴った時だった。

「あれ……もう七時か」

お風呂に入りそびれたことに気づいたけれど、これだけ疲れたまま入浴していたら、より一層体力を消耗していただろう。

夕食のメインは鶏肉のソテーだった。苦手な皮や筋にあたらないよう、丁寧にほぐして食べ進めた。味噌汁にはふわりとした丸い麩が浮かんでいて美味しかった。

消灯は二十一時だが、いつも寝ている時間よりも早すぎてなかなか寝付けなかった。どこからか聞こえるいびきに耐えながら、ゆっくり眠りについた。

起床のチャイムが鳴るより前に、ぱっと目が覚めた。多分、マイクが入る音をスピーカーが拾っていたんだろう。

朝食を食べ終わって、ベッドに横になろうとしたとき、カーテンが開いて声がかけられた。

「九時からデイルームで作業療法やってますから、来てくださいね」

日中に寝すぎると夜の睡眠検査に支障が出てしまうだろう。同じように声がかけられた隣の人は気分が優れないことを理由に断っていたけれど、私はそうはいかない。日中はゆっくりしたかったけど、たとえ入院中であっても、ぐったらはいけないということだ。名残惜しさを感じながらベッドから起き上がった。

デイルームに向かうと、既に何人かが集まっていた。それぞれが席について、ある人は複雑な塗り絵を、ある人は刺し子を、ある人は毛糸で編み物をしていた。

入り口で立ち止まっていると、編み物を教えていた若い男の先生がこちらに気づいてやってきた。

「おはようございます。今日から参加する人だね。主治医の先生から聞いているよ」

そう言って、空いている席に案内してくれた。

「ここでは指先を動かす活動をやっていて、塗り絵や折り紙、編み物などの手芸もあるよ。どれがやりたい？」

花の塗り絵や、毛糸や、刺し子の本を席まで持ってきてくれた。塗り絵は色のセンスに自信がないからやめておこう。刺し子なら授

業でやったことがあるし、全く経験のない編み物よりはできると思う。

「えっと、じゃあ、刺し子がやりたいです」

「お、いいね。この本にいろんな指し方が載ってるから、できそうなの選んでみて」

そう言って私の目の前に本を置くと、他の参加者に呼ばれて行ってしまった。本にはいろんな種類の刺し子がレベル別に並んでいて、授業でやったものを探すと……あれ？一番最後のページに載ってる。これ、結構難しかったのか。どおりで夏休みの課題にしても終わらなかったんだ。……リベンジしてみようかな。

先生に声を掛けると、すぐに応じてこちらに来てくれた。

「これにします。学校でやったことがあるので、できるはずです」

それを聞いて次に持ってきてくれたのは十五センチ四方の薄い布と、フリクションボールペンだった。

「この布に本の型紙を写してみて。完成したらアイロン掛けるからそのペンで大丈夫だよ」

本を布に透かして、慎重に写し取っていく。曲線が多く、線が何重にもなってしまった。先生を呼び止めて見せると、それでもOKをもらえたので、ついに針と糸を手にした。はさみと針の扱いが厳重だったのもここらしい。私も初日、うっかり筆入れに入れっぱなしになっていたコンパスをナースステーションで預かってもらっている。

切り取った糸一本分を縫いきったところで時間になってしまった。平日は毎日やっているそうだから、毎日取り組めば作り終わるだろう。

午後からは自室で課題を進めた。見回りに来た看護師さんたちが、青チャートを目にすると決まって「懐かしい！」と言うのが面白かった。みんなこれに苦しめられたことがあるらしい。

三時くらいに集中力が切れた頃、何人かが荷物を持って廊下を通るのに気づいた。そうだ、お風呂入らなきゃ。

入院セットとごちゃごちゃしたバッグの中身を探して、入浴のための一式をトートバッグに詰め込む。

廊下の突きあたりの洗面所の、シャワー室とお風呂に向かうと、どちらも使用中らしく、既に待っている人がいた。

あちらも気づいたようで、目が合った。気まずくなって立ち去ろうとすると、声を掛けてきた。

「こんばんは！」

元気そうな女の子で、体格は私より小柄だ。

「昨日来た人？　作業療法にもいたよね！」

私は気づいてなかったけど、あの場にいた人みたいだ。

「同じくらいの年に見えたから、話してみたかったんだ！　何歳か聞いてもいい？」

「じゅ、十七です。高校二年です」

「じゃあ学年、一個下なんだ。すごく近いね」

こんなに社交的な人はなかなかお目にかかれない。気まずくならないように話題を振ってくれたのかな。

「シャワー室のほうはさっき入ったばっかりだけど、お風呂のほうはもうすぐ出てくると思うよ。昨日入れなかったなら、先にどうぞ」

（髪がテカってたのかな？バレてたら恥ずかしい……）

「今の季節は涼しいから、私も入らない日もあるよ。毎日入るの大変だよね」

その後、雑談すること約五分。振られた話題になんとか乗りつづけることができた。お風呂のドアが開いて、前の人が出てきた。

「毎回ドアのカギが閉まるから、その人についていって、ナースステーションに声をかけて！」

親切に教えてくれた通り、あとを追いかけてナースステーションにたどり着いた。前の人がドライヤーを借りて部屋に戻っていく。看護師さんがお風呂のカギを再び開けてくれたので、私はお礼を言って、先に入らせてもらった。

（名乗るべきかわからなくて、相手の名前も聞かなかったなあ。わかったのは、あの人の明るさと、私より一歳年上っていうことだけ。先輩、と呼ぶことにしよう……）

夕食の前もまた課題を開いてみたけど、いまいち集中できない。場所を変えたいと思い、デイルームを思い出した。夕食も向こうで食

べればいい。

早速数冊のワークを抱えて向かうと、さっきの先輩がいた。一人でテレビを見ている。

「こんばんは」

今度は、私から声をかけてみる。

「あ、さっきの人だね、こんばんは！」

「順番譲っていただいて、ありがとうございました」

「ぜんぜん大丈夫！　そんなにかたく接しなくていいんだよ？」

先輩はとってもいい人そうだ。「どこから来たの？」とか、「何の課題？」とか、夕食の時間まで話しこんでしまった。

夕食後は、デイルームにあった電子ピアノに触ってみた。譜面台にはクラシックの曲集が置いてあったが、初見で弾くには難しそうだった。そこで、覚えていたとあるゲームのメインテーマを弾くと、先輩がはっと振り返って嬉しそうに声を上げた。

「それ好き！」

私も嬉しくなって、他の曲も弾き始めた。決してうまくないし、うろ覚えだったから何度も間違えたけど、先輩が興味津々に耳を傾けてくれたので気持ちがよかった。

その夜は楽しい気持ちが抜けなかった。気持ちが高ぶっていてなかなか寝付けなかった。

次の日も、刺し子と課題とおしゃべりの一日になった。たまに一階に降りて、お菓子を買ったりお茶を飲んだりした。先輩との会話

は弾んだし、病院食も相変わらず悪くなかった。

そして木曜日。今日から二日間の検査が始まる。カフェインがとれないので、コーヒーショップのドリンクはお預けだ。検査の開始は夜なので、それまでの間、いつも通りデイルームで過ごした。作業療法にも参加して、刺し子も終わらせた。作っていたものはコースターだったらしい。アイロンをかけて形を整えると見栄えはかなり良かった。指に数回穴をあけながら作ったとは思えないだろう。

先輩ともいろんな話をした。お互いの学校や部活のこと。特に、学校行事の話は楽しそうにしてくれた。先輩の学校は女子高で、オーストラリアに姉妹校があるらしい。修学旅行ではアメリカに行ったそうだ。

それから、勉強や進路のことも少し話してくれた。先輩も理系で、県外の大学の薬学部に推薦で受かったらしい。めちゃくちゃすごい。「受けてみたら、受かっちゃった」と言っていたけど、それならもっとすごい！

「この後から検査なんだね、頑張ってね！」

検査の時間が近づくと、先輩はそう言って手を振ってくれた。

検査室は病棟内にあった。廊下のよくわからない場所にあるドアの正体がわかった。ベッドとスタンドライトと、検査器具が並ぶ机だけがある部屋だった。

まず、ウエストにカラフルな器具のついたベルトを巻かれた。特撮のヒーローよろしく変身でもするのかと、一瞬疑った。

検査担当のお医者さんは慣れた手つきで、一本一本色の違うコードを首や脇腹といった皮膚に貼りつけ、もう一端をベルトの同じ色の部分に取り付けていく。

それだけじゃない。頭にノリみたいなものを塗られて、コードを張り付けられる。鼻の下にも、呼吸を記録するセンサーが取り付けられ、むしろ息がしづらい。仕上げに、頭部の機器がずれないようにとネット包帯をかぶせられた。

検査室にある姿見で全体を見せてもらうと、私はここが遠くの病院でよかったと心から思った。なかなかに衝撃的で、間違っても知り合いには見られたくない姿だった。

検査室に入ったのは八時くらいだったが、機器のセッティングが終わるころには九時近くになっていて、ちょうど眠気がやってきた。

部屋の電気を消されて部屋にひとりになると、間もなく眠りに落ちた。

「検査終了です、起きてください」

看護師さんの声で起こされたが、目覚めはとてもいい。時計を見ると六時だった。この時間にこんなにすっきり起きられることはめったにない。検査もうまくいっただろうか。

器具は検査が終わる夜の七時まで外すことができない。廊下の曲がり角で人が通り過ぎ

るのを待ったりして、人目を避けながら部屋に戻った。

今日はほぼ一日中検査だ。朝食のあとは二時間ごとに検査室に向かう必要がある。しかもその検査室は外来病棟にあるから、外来の患者さんとどうしてもすれ違ってしまうだろう。

朝食のレーズンロールは中にマーガリンが入っていた。デイルームにある電子レンジで温められたらもっと美味しかっただろうな。

一度目の検査の十五分前に病室を出た。外出時間外に病棟を出るのはドキドキした。早い時間だが人通りは多く、道行く人々のありとあらゆる視線を集めながら外来病棟の廊下を進んだ。

検査の五分前に検査室についた。意外と時間がかかってしまった。なぜかというと、途中で道に迷って、そのまま進んでいったら別の科にたどり着いてしまったからだ。トイレを借りるふりをして、何事もなかったかのように出てきた。

検査室の分厚そうな金属の扉をノックする。分厚そうで返事が聞こえるか不安だったので、耳を扉にぴったりくっつけて耳を澄ました。

「はーい」という遠い返事が聞こえて部屋に入ると、その内装はかなり不思議な見た目をしていた。

部屋のど真ん中にシングルサイズのベッドが一つ。そのそばには謎の機械があり、天井

の隅には監視カメラが設置されている。

検査担当の先生は二人いて、ドアで繋がった別の部屋からモニター越しにこちらを見ている。返事をしたほうの一人がこちらにやってきて、ベッドに横になるように言った。

ベッドは病室のものと変わらなかった。ただ、検査開始まで横になったまま待っていなければならない。ちょっとでも長く目を閉じたら別室から声が飛んでくる。

電気が消えるのが検査開始の合図だ。目を閉じれば、すぐに意識が途絶えた。

三十分はあっという間だ。まだ眠いが、検査である以上時間通りに起きなければならないので、しぶしぶ起き上がった。

病棟に戻るときも人目は避けられなかった。何があっても今度は迷わないよう、できるだけ確実な道を通った。

……これを五回繰り返した。視線を浴びることも、短い時間で強制的に起こされることも、両方疲れた。

そっか、今日は風呂入れないのか。ノリで固まった頭を掻いて気づいた。夕食を詰め込み、早めに寝た。

今日はついに退院の日。迎えが来るまではまだ時間があったから、朝ご飯を食べ終えて、課題を持ってデイルームに行った。先輩はいつものようにいたが、荷物をまとめて机に載

せていた。

隣の机にノートを広げて席につくと、スマホから顔を上げて挨拶をしてくれた。

「おはよー。今日退院だもんねぇ。学校はいつから始まるの？」

「おはよう。来週の火曜日から……だったはず」

「そっかぁ。私はいつになったら退院できるかなぁ」

そんなふうに疑問形で言われても、ヘタなことは言えない。返答に困っていると、同室の三十代くらいのお姉さんがデイルームに入ってきた。

「あら、今日外出なの？」

「そうだよ〜。久しぶりに家に戻るの。買うものもあるし」

「買い物ねえ、大変ね」

「ほんとに。外怖いよ、出たくない。この前の外出でパニックになっちゃってさ」

先輩はこちらに向き直って言った。

「さっき早く退院したいって言ったけど、無理だよね。だってやっぱり、外が怖いんだもん」

その言葉を聞いて、私は勝手に悲しくなった。あんなに明るくて優しい先輩の心が、どうしてこんなに曇ってしまうんだろう。

私たち二人の沈黙のあと、病院食の献立表を見ていた同室のお姉さんが先輩に呼びかけた。

「来月は行事食があるのね」

「ほんとだ、お花見献立！　筍ご飯すごく好きなんだ。楽しみ！」

先輩の表情は明るくなったけれど、私は少し面食らった。先輩の口ぶりはまるで、来月もここにいることを疑わないようだった。大学だって、始まっているはずなのに。

先輩の外出の後、昼過ぎに私はここを出る。来月の話で盛り上がる二人を見て寂しさを感じながら、最後のチャンスだと思い、席を移った。先輩の隣に座るのは初めてだった。さっきの話のあとから、私はひどく緊張していた。

「どのくらいで迎えが来ますか」

「十五分後くらいかな。部屋でやることもないからここでお母さんを待ってるの」

先輩は大きなバッグの中をガサゴソとかき回しながら言った。

「きみは何時で退院なの？」

「一時の予定です」

「そっか、じゃあ私の外出のほうが早いのか」

時間が近づくと、焦りで話すことも思いつかなくなってくる。静かにテレビを見ていると、ついに、エレベーターホールの窓越しに先輩の母親らしき女性の姿が見えた。看護師さんを呼んで、何か話している。

「あの、外出の時は外してもらえるんですか、それ」

先輩の手首のリストバンドを指さして言った。

「切ってもらえるよ。そのままだと、外出し

た時なんか恥ずかしいからね」

ここでの距離感がわからなくて、最後まで名前を聞くことはできなかった。ただ、外されるのを待っている二人分のリストバンドに、お互い目をやっていた。口にはできなくとも、知りたかった。

またね、なんて縁起じゃないかもしれない。ふさわしい言葉は……

「じゃあね！」

「ありがとう、元気でね」

変わらない明るい笑顔だった。

来月、結果を聞きに来るときには、彼女がここにいませんように。歯を食いしばって、笑顔のふりをした。